
短編集

片岡

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N3303Z

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ジャンルも方向性もバラバラなものを無造作に詰め込んでいく予定。モバゲーやってた頃に公開していた作品もあります。馬鹿だったり病んだり意味わからなかったり。たまに著作権放棄のお題をお借りして好き勝手やってるかもしれませんが。

いじめく(前書き)

阿呆です。

つづめく

“それ”は闇の中で虚空を見つめていた。そうして時たま、通り過ぎる人々を恨みの籠もった瞳で睨みつけては暗闇で蠢うごめいていた。

父を、殺された。次に母を、そして妹。果てには手に手を取り合っ
てようやくと共に逃げ延びてきた弟までもが、その凶刃にかかり、
尊い命を奪われた。

おれたちがいったい、何をした！

……そう、叫び出したい気持ちだった。が、少しでも目立つよう
な行動を取れば己も殺されてしまう。“それ”はぐっと堪えた。

だが、悔しい。

おれたちがいったい、何をした……？

其処に在るというだけで嫌われ、蔑まれ、命を奪われる。こんな
にも不条理なことが、果たしてあって良いのだろうか。

復讐、してやる。

そう、そうだ。復讐、復讐だ。復讐してやるのだ。家族の、仇を
取るのだ。

“それ”は駆けた。疾風の如く素早く駆けた。

「きゃああああ！」

絹を裂くような女の悲鳴。手には、禍々しい凶器。

またアレか！！

必死に逃れようとするも、時既に遅し。あの悪夢が、再び襲う。

徐々に動かなくなる手足。霞む視界。己の情けなさに、涙が出る。此処まで、か。

ああ、父上、母上、年端もいかぬ妹よ。最期まで己の身では無く、おれの身を案じた弟よ。仇はとれませんでした。もうすぐおれも、其方へ逝きます。

「もうやだあ！ どうしてこの家ってゴキブリがこんなに出るわけ！？」

かのじょ　たいよう

この夏が終われば、きっと私の命は枯れ果てるのだわ。
張りのあるこの肌はしみだらけになってしわくちやの老婆のよう
になるのだわ。

自慢の美しいこの黄金の髪は抜け落ちていくのだわ。

嫌。嫌よ、そんなの絶対に嫌だわ。

ああ、夏の太陽よ。燦々と私に降り注ぎなさい！
もっと！　もっとよ！

もっともっとと光をちょうだい！　もっと私を輝かせて！
そうよ。そうすれば、きっと私は一日でも長く彼の前で美しく咲
き誇ることが出来るのだわ！

ああ、ねえ、愛しい貴方。もっと私を見てちょうだいよ。そうす
れば、もっともっと、私、うんと美しく咲いてみせるわ。
この命を、咲かせてみせるわ。

ねえ、私を見て。

私は太陽の化身

（待つて、私から目を逸らしちゃ嫌！）

（ずっと私を見ていて？）

（そうすれば、太陽なんかよりも優しい光で貴方を包んであげるわ）

学校もの詰め合わせ（前書き）

学校っぽい単語で。

学校もの詰め合わせ

“ おはよう ”

「 おはよう愚民共！ 」

「 え……、なにお前。殺されてーの？ 」

「 お前、ちよつと金持ちだからって調子のんなよなー！！ くそつ、羨ましいー！！ 」

「 ふはははは！ 所詮庶民には到達することの出来ない場所にぼくはいるのだよ！ さあ、崇め、称え、いだあつ！？ 」

「 ふあああつ……。……。あれー……。おれ、なんか踏んだー……。？ 」

「 「グッジョーブ！！」 」

殺意にみなぎってる奴
村井 むらい

羨ましがってる奴
赤城 あかぎ

金持ちな奴
おくのみや
奥乃宮

踏んだ奴
さがさき
嵯峨崎

“遅刻”

「せんせー、おはようございまーす」

「はいはい、おそようございます。市田、今は昼だ。確実に早い時間じゃない」

「あららー……。遅刻しました。ごめんなさーい」

「素直でよろしい。で？ 遅れた理由は？」

「川で溺れてるお婆さん眺めてたら遅刻しましたー」

「助けるよ。誤魔化すための嘘にしてもそれは酷いだろ。先生はお前をそんな子に育てた覚えはありません」

「いっちゃんもせんせーに育てられた覚えはありません」

遅れた奴
いちだ
市田

担任のせんせー
たなか
田中

“迷子”

「あいつ、おっせーなあ……」

「そろそろ行かなきゃいけない時間なんだけどね……」

「せつかくの修学旅行があいつのせいで台無しになるなんて、誠に遺憾である」

「ご立腹だねー……、椿さんは」

「すいませーん！ 道に迷いましたー！」

「遅いぞ、内山ー。お前のせいで椿がキレて先生はガクブルだった。罰として其処にある噴水の周りを五十周」

「ええ！？ なんなんだその体育会系のノリ！」

「お前が迷ったのは道ではない。人生である」

「相変わらず椿は俺に酷い！」

困^{ひだ}つてた奴
樋^{ひだ}田

キレた奴
椿^{つばき}

迷^{うちやま}つてた奴
内^{うちやま}山

“居眠り”

「はい、じゃあ、この問題を嵯峨崎ー、解けー」

「せんせー、嵯峨崎は今ぐっすりおねんねタイムでーす」

「よーし、市田ー、叩き起こせー」

「いやでーす。いつちゃんの手が腫れちゃうでしょう」

「嵯峨崎ってそんな石頭だったっけか？」

「嵯峨崎、起きろ。先生はお前のせいで酷く困っておられる」

「ううーん……、おれ、なんだかとても眠いんだパトラッシュ」

「誰がパトラッシュか。殺されたいのか貴様」

「ぬあっ？」

「だいたい眠いとか嵯峨崎寝て……、うわぁ……、そこまでやるう？」

「椿ー、お前のその心遣い、先生はとっても嬉しい。でもな、先生、蹴り起こせとは言っていない。脳天に踵落としするなんて嵯峨崎を殺す気か。椿はもうちょっと皆に優しくしてやろうなー」

「酷く足が痛む。何故だ」

「嵯峨崎の頭は樁の踵落としに打ち勝ったのか」

「誰かおれに消しゴム投げただろう。おれの眠りを妨げる者は何人たりとも赦さない」

「嵯峨崎お前頭可笑いんじゃないのか」

嵯峨崎の頭は樁の踵落としの威力をもともしない。

人物紹介とか載せてたけど嵯峨崎と樁だけ覚えとけば問題ないと思う。

“授業妨害”

「えー、じゃあ、この式に当て嵌まる公式はなんでしょう。はい、嵯峨崎」

「先生、嵯峨崎また寝てるぜ」

「よし、村井、叩き起こせ」

「無理だつて。先生、こいつきつと何かの病気なんだ」

「仕方ない。じゃあ、秋澤、わかるか」

「先生！ 秋澤は手鏡に映る自分に夢中です！」

「よし、内山。その手鏡叩き割ってくれ」

「俺じゃ無理だ！ 嵯峨崎の頭に任せましょう！ えいつ」

「ほ、本当に割れた……。嵯峨崎くん、大丈夫かな……」

「微動だにしねーな」

「こいつ、実は寝てるんじゃないかって死んでるんじゃないのか」

「あああああ！！ なんてことすんだよ内山！！」

「だって先生が叩き割れつて」

「嵯峨崎もだが、秋澤、お前はいつたい何のために学校来てんだ？」

「勿論美しいオレを愛するために決まってんじゃないスカー。勉学に励むオレヤバくね？マジばねえ」

「……は、励んでないと思う……。っあ、ご、ごめんなさいっ……」

「秋澤、お前帰れ」

心配してた奴
とりこえ
鳥越

ナルシーな奴
あきさわ
秋澤

“ 抜き打ち ”

「この間やった抜き打ちテストのことだけどな、正直、ほんとと最悪だった」

「いきなり抜き打ちとかやるせんせーが最悪だと思ったー」

「市田、お前廊下に立つか？」

「冗談でーす」

「で、話を戻すが……、なんだ平均点30点って。舐めてんのか」

「先生ぺろぺろしたって不味いだけだろ？」

「内山、お前そろそろ本気でどつくぞ」

「私は先生ならぺろぺろできる」

「椿、正気に戻れ。それでまた話を戻すが、このクラスでまともな点を取れたのは鳥越と椿と真崎、この三人しかいない」

「へー、真崎もか。すげーな」

「えっ？ 滅茶苦茶簡単だったよ。ねえ、鳥越さん」

「えっ……、う、うん。簡単だった」

「あの程度で難問とは笑わせる」

「お前らちよつと殴らせて」

「といふかな、大体可笑しいだろ。なんでテストを開始した直後に過半数の奴が机に伏せるんだよ。少しは努力しろ。嵯峨崎に至っては名前すら書いていない。真っ白な回答用紙が手元に届いたときは先生、目が飛び出るかと思った」

「な、名前書いてないのに、わかったんですか……？」

「名前を書く欄に、“眠い”って書いてあった。記入してあったのはそこだけだった」

秀才まことそんな奴
真崎

“居眠り 2”

「で、この公式を此処に当て嵌めて……、」

「 $x \parallel 2$ 、 $y \parallel 4$ 。これを代入すると……」

「ということだ。つまり……」

「であるからして、このように証明出来るわけだな。
えー……、」

「……そろそろお前ら起きろ」

クラス全員でハイパーおねんねタイム

“授業妨害 2”

「少しよろしいですか、田中先生」

「鬼頭先生、よろしいですけどいったい何処から入ってきてんだア
ンタ」

「え？ やだなあ、窓からに決まってるでしょう？ 見てたじゃないですか」

「そんな爽やかな笑顔で言われても。此処が何階だかご存知ですか？」

「四階ですよ？」

「ですよじゃねーよ」

「そんなことより前の時間でこの教室に教材を置き忘れてしまつて……、あ、あつたあつた。早く理科室に戻らなくっちゃ」

「どうして鬼頭せんせい二階にある理科室からわざわざ校舎の壁を伝つてこの教室に来たんだろぅねー」

「ちょっとしたチャレンジです」

「今すぐ捨てる。その無駄なチャレンジ精神を」

チャレンジヤーなせんせい
鬼頭きとう

“図書室”

「あ、あのつ……、赤城くん、図書室は飲食禁止で……」

「えー、別に良いじゃんか鳥越ー。腹減つたんだもん。仕方ないだろー」

「でも……、」

「あ、やべっ。コーラ溢した」

「 ツ！！ テメエえええええ！！ そこに直れええええええ
！！」

「ええええええええええ！？」

「図書室は飲食禁止だっつってんだろぅが！！ その汚れた本を修復するのにいたいどれくらいの時間がかかると思っただが！！
一日だ……！！」

「た、たった一日じゃんか！」

「その一日でどれくらいの本が整理出来るんだろぅなあ！？」

「う……っ！」

「誠心誠意土下座しろ！！ 三回まわってワンと言ええええええええ！！！！」

「うううう……。 (ぐるぐるぐる)……わんっ」

「あれ、椿、鳥越に姉か妹なんていたっけか？」

「いや、あれは鳥越です」

「鳥越は二重人格なのか」

いつも内気な鳥越さんは本に命かけてる

“説教”

「いや、相変わらず田中先生の請け持つ椿と鳥越と真崎の三人はとても優秀な生徒ですなあ」

「はは、有難う御座います」

「これも偏^{ひとえ}に田中先生の教育の賜物でしょうな！」

「いえいえ、そんなことは……、」

「ですが……、その他の生徒の成績が少し……」

「……………」

「三ヶ月待ちましょう。その間に彼らの成績を上げることができなければ、クビも覚悟して下さいね」

「マジでか……」

果たして校長に教員をクビに出来る権限があるのか。

信じる者は巢食われる

「ああ、可哀想に」

そう呟くと、声は届いてしまっていたらしい。彼女は恐る恐る俺を見上げた。

大きな大きな飴色の瞳。極上の蜂蜜みたいな、日本人にはあまり見ない綺麗な綺麗な髪。嗚咽を漏らす度に震える肩を慰めるように撫でるそれは美しい。

「だ、れ……」

「さあ、誰でしょう。誰であってほしい？」

「……………」

はくはくと何かを言いたげに口を動かし、そして閉ざしてしまつた。とりあえず何も言わず、待つてみる。

こんな人気の無い冷たい廊下に一人座り込んでいるのは、桐山きりやま京みやこ。数ヶ月前までこの学園のアイドルだった女の子だ。

珍しい時期に転入してきた彼女は、学園の中でも人気のある男子生徒から溺愛されていた。しかし、それでも女子たちからの嫉妬を買つことはなく、誰からも愛された女だった。

……そう、数ヶ月前までは。

今はもう、誰にも見向きもされない可哀想な女の子だ。

桐山の人気が落ち始める数か月前、“彼女”はやってきた。望月もちつき

有沙ありさ。桐山に負けず劣らずのとびっきりの美人だ。

桐山のふわふわな髪とは違って、黒髪の真っ直ぐなロングストレート。目は赤。何処か冷たい印象を抱かせる、和風美女。

彼女の手によって、桐山は陥れられた。

俺はよく知らないが、桐山は裏では結構あくどいことをやっていたんだとか。

人気のある男子たちを身体で誘惑した。嫉妬で虐められないように男子たちの私物を女子たちに流していた。事実、男子たちの私物は度々無くなることがあったらしい。

あれよあれよという間に桐山の味方はいなくなり、今では皆が望月の配下にある。望月宗教でも作りそうな勢いだ。

と、まあ、話を戻して。

彼女　桐山がこんなところにいる理由は簡単だ。誰かに見つからない為。虐められない為。

が、その努力も空しく、結局見つかってしまったらしく、制服はぼろぼろになっている。

「誰で、あつてほしい？」

もう一度訊ねた。

すると、彼女は小さく、けれどはっきりとした声で言った。

「わたしの、敵じゃ、ない人」

「そう、じゃあ、味方になってやろうか」

「……ほんとう?」

期待の眼差しが突き刺さる。

さあ、俺は本当かどうか何も言わない。好きに思いなさい。さ

あ、俺はどっちだろうね。

敵と判断しても良いけれど、お前にそれほどの余裕は無いだろうよ。

甘く微笑んで抱き締めてやれば、すぐに背に細い手が回った。

信じる者は巢食われる（後書き）

逆ハーって御存知ですか？逆ハーレムの略称で、まあハーレムの逆ですよ。

逆ハー補正って御存知ですか？まあ、男共の好意を無理矢理その補正のかかっている女の子に向けるものですよ。

勿論、あんまり良いものじゃありません。大抵は途中で解けてその補正のかかっていた女の子は嫌われます。

傍観ものではもう王道ですね。傍観っていう非王道の中の王道。

で、逆ハー補正あるんなら、傍観補正があったって良いんでね？って話。

もしかしたら続きを書くかもしれないけど、現時点ではそんな気力は全く起きないので一話完結に。

訴えて良いですか（前書き）

ギャグが書きたかっただけのもの。でもギャグになってない。

台詞無駄に多い。

相変わらずの残念な文章。しかも何年か前に書いたものだからそれに拍車がかかってる。

モバで公開してました。捨てるのも勿体無いし、出しちゃおうかなって。

無駄な勿体無い精神ですね。

一話完結。

訴えて良いですか

「此方、A部隊！　ただいま、お嬢の家に到着！　どうぞ！」

「此方、B部隊！　ただいま、お嬢の家の玄関に侵入成功！　どうぞ！」

「一人二役でくだらないことするのやめてもらえますか」

「あづあつ！！　熱ッうううう！！！！？」

いつのまにか私の家に侵入していた不審者をちょうど沸かしていたお湯で撃退した。モーニングコーヒ―は飲めなくなってしまったけれど、変態を撲滅出来たと考えればどうってことない。

「何すんだお嬢！！」

「私、ヤクザの娘でもなんでも無いんですから、いいかげん“お嬢”って呼ぶのやめてもらえますか」

「やったなー、お嬢ったら！　この照れ屋さんっ！」

「死んでくれますか」

「いだだだだだ！　お嬢！　お嬢！　疑問文疑問文！！　おつかしいなー！！　疑問符がついてなかったように聞こえたんだけど！！！！　いつつもついてないけどそこはつけないと！！」

「それが何か」

「あれええええ！？　お嬢！？　色々問題あるよ！！　せめて疑問文にしてええええ！！」

「それが何か？」

「そこじゃなくて！！」

私は鳩尾あたりで力を籠めていた足を退かし、自室へ戻った。靴の中身を見て、忘れ物が無いか確認してから肩から下げる。何故か変態がついてきていたけど、無視して階段を駆け降りる。「ええっ！？　お嬢！？　ちよっとおおお！！」私は何も聞いていない。靴を履き、振り向いて言った。

「好い加減、ストーカー容疑で訴えますよ、伏^{ふし}野心^{やしん}さん」

「お嬢のストーカーならよろこんで！！」

「そうですか。……あ、もしもし、警察の方ですか。最近、ストーカー、」

「お嬢おおおおお！！！！？　冗談じゃなかったの！？　ちよっと待って！！」

私の名前は石谷^{いしや}です。
彼我^{ひが}。最近、
ストーカー被害に悩まされていま

訴えて良いですか（後書き）

不審者とその被害者のお話。

罵倒しても良いですか

「おはよう石谷！ さあ、今日こそ答えを出してもらおうか！！
俺の妻となるか！ 答えは『YES or はい』だ！！」

「わかりました、くたばって下さい」

「いや、違くて、」

「わかりました、まるで襤褸雑巾のような無様で惨めな姿で息絶えて下さい」

「いや、違くて、」

「わかりました、私の平和のために死んで下さい」

「ぐあつ！！！！？」

私はちょうど落ちていた鉄パイプを彼の脇腹を狙って突き出した。至近距離からの攻撃。勿論、外れるわけが無い。見事にそれはヒットし、彼は地に崩れ落ちた。

伏さんはそれを見て鼻で笑っていた。ついでに貴方も地に崩れ落ちてくれますか。

彼は^{なぐ}宇座^{いひと}威人。非常に不本意ながら幼稚園、小学校、中学校、そして、今、高校と続いてきた幼馴染だ。ち

なみに伏さんとも非常に不本意ながら幼馴染である。非常に不本意ながら。

そして、非常に残念ながら、宇座さんは私たちの通う学校の生徒会役員でもある。非常に残念ながら。

「っは……、あっはっはっは……！！ さ、さすが俺の妻となる女だ……！！ 過激なのも良いけど、たまには素直な、ぐはあっ！！」

「退いてもらえますか、生ゴミよりも使えない人」

「な、生ゴミ以下……だと……！！！！？」

「はっはっはっはダッサー！！」

「私の為に地に伏してくれませんか」

「ぐああああああ！！」

私は未だ手にしていた鉄パイプで思いきり伏さんの背を突いた。伏さんは見事な反りを披露し、スローで崩れ落ちた。背景に散ったように見えた薔薇の花はきつと私の幻覚だろう。

罵倒しても良いですか（後書き）

うざい人と不審者被害者。

挨拶しても良いですか

「おはようございます、神亀^{じんき} 零尾^{れいび}さん」

「おはよう、彼我ちゃん。今日も元気ねえ」

ゆつたりとした口調にほわほわとした笑顔。癒し系の名は伊達じゃない。私でも癒されてしまうのだから。

こんな無愛想な私とも仲良くしてくれて、本当に彼女はまるで聖母のように清らかで美しい柔らかな心を持っている。

「ねえ、彼我ちゃん。あれは何かしらあ？」

不思議そうな顔で彼女が指差す先にあるものは伏さんと宇座さん（生ゴミニツ）。

「神亀さんが気にする価値も無いものです」

「そーお？　なら、良いけどお……」

そう言いながらも気になるのか、話をしている最中もチラチラと

見ている神亀さん。神亀さんの視界に入るなんておこがましいにもほどがある。

「神亀さん、あんなのを気にするよりも、私と話ませんか。……あ、そういえば、駅前で経営していたラーメン屋、知ってますか」

「えっと……、“一発屋”っていうところなら知ってるけど……、そのこと、かしらあ？」

「あそこ、潰れて、新しくクレープ屋が出来たんですよ。今度、一緒に行きませんか」

「クレープっ？ うん、行きたいわあ」

きらきらと瞳を輝かせて嬉しそうに笑う神亀さんは三十分で食べ切れたら一万円という巨大パフェを僅か三分で食べ切ったことで有名だ。

挨拶しても良いですか（後書き）

美人で綺麗な人と被害者。

貶しても良いですか

「なあ彼我ちゃんパツパラパーでアツパラパーなナルシストで親に悪意の籠った名前つけられた可哀想な子知らん？」

「ナルシストは知りませんが、パツパラパーでアツパラパーで親に悪意の籠った名前つけられた似非関西弁の可哀想な人なら今、私の目の前にいますよ」

「えー？ 何処におんねん、そんな痛い奴」

「鏡を見て下さい」

「おかしいで彼我ちゃん。俺しか映つとらん」

「それが真実です」

「酷いわー、彼我ちゃん」

そう言つて、「およよよ」と態とらしい泣き真似を私の前で恥ずかしげも無く、なんのプライドも無く晒したのは、非常に残念ながらこの学校の生徒会長、柳瀬^{うせ} 江南^{えな}先輩である。非常に残念ながら。

「どうでも良いから、とりあえず退いてくれませんか。私、先生に呼ばれているんですが」

「人のこと散々貶しといて『どうでも良い』は無いんじゃない？　で誰先生に呼ばれとるん？」

「白羽^{しゅうは} 慧^{すい}先生ですけど」

「白羽ちゃん？　アカンで、あの人はレズっ子やから。襲われてまうで」

「汚らわしい下品な妄想を語らないでくれますか」

「え、ちょ、なんなん？　その心底軽蔑したような眼。せつかく可愛い後輩を思つて忠告したのに」

もう相手にするのも馬鹿らしい。私は柳瀬先輩の横をすり抜けようとした。

しかし、

「ちよっ……！　待ちいや彼我ちゃんっ！」

「……あ、……」

不意に渴いた音を立て、掴まれた腕。交わる視線。柳瀬先輩の頬を微かに赤らんでいて、

「彼我、ちゃん……」

「柳瀬先輩……、」

柳瀬先輩は少し眼を伏せて、すぐに私と視線を合わせた。心なしか顔がさつきよりも赤くなっている気がする。

「なあ、彼我ちゃんは気付かないふりしてるんか？ それとも本当に気付いてないだけ？ 俺が、本当に宇座を見つける為だけに、彼我ちゃんに会いに来てると思うとるん？」

「柳瀬先輩……い……、」

その瞳の力強さに、私は思わず、

「発情期ですか、気持ち悪い」

「期待させといてそれなんか？」

心に秘めていた本音をぶちまけてしまった。
肩を落とし、柳瀬先輩は深いため息を吐いた。もう用は無いだろ
うと判断し、私は白羽先生のもとへ向かう。

私を引き留めている声は聞こえているが、敢えて聞こえないふり
をしている。柳瀬先輩は相変わらず面倒臭い人だ。

貶しても良いですか（後書き）

ウザい人と被害者。

逃げてもいいですか

職員室に行けば、白羽先生は居らず、訊いてみれば、理科準備室にいると言う。私は教えて下さった先生に礼を言い、理科準備室に向かった。

理科準備室につき、ドアを開ければ、待ち構えていたように白羽先生が口を開いた。

「やっと来たの。遅いじゃない。何してたの」

「すみません、柳瀬先輩に絡まれていました」

「ああ……、柳瀬に。でも、だからといって、それが遅れて良い理由にはならないわ。社会に出たら、それは通用しないもの」

「はい、すみませんでした」

「わかったなら良いわ」

切れ長の冷たい瞳。そこにそっと寄り添う泣き黒子。綺麗に纏められた茶髪。何故、教師なんて職についているのかわからないほど白羽先生は綺麗な人である。

「それで、あなたを呼んだ理由だけれど、」

「はい」

「……特に、無いのよ」

「……………は？」

意味がわからず、思わず間の抜けた声を出してしまった。なら、どうして私は呼びだされたのか。ああ、理由が無いのか。

「私があなたに会いたかった……。それだけじゃ、駄目かしら」

少し頬を染め、私の右手をとり、そつと両手で包みこむ白羽先生。
なまこみ
伏さんと宇座さんのせいで無駄に鋭くなった私の危機を察知するセンサーが大音量で鳴っている。

「、失礼ですが、白羽先生には人と少し違った性癖があります？」

「……私、レスビアンなの」

「すみません、私、用事を思い出したのでこれで失礼します」

勿論、用事等はないが、私は全速力で理科準備室を飛び出し、教室へ向かった。「また来てちょうだい」出来れば辞退したいのです

が、
良い
です
か。

逃げても良いですか（後書き）

（先生としては）素晴らしい人と被害者。

注意しても良いですか

「加賀^{かが}兄さん、なんですか、その奇怪な形状の布は」

「これえ？全くもう、これはネクタイでしょう、ひーちゃん。相変わらずドジっ子なんだから」

「あなたにだけは言われたくない言葉ですね」

私の視線の先にはネクタイを言葉では表現できないほど意味のわからない身につけ方をしている兄さんがいる。

きっと、このまま彼は会社へ出勤していくつもりなのだろう。仕方なく、私は兄さんのネクタイを直してあげることにした。

「……しっかりして下さい、それでも私の兄ですか」

「……僕、そんなに頼りないかなあ……」

「はい」

眉を下げ、うるつると小動物のような瞋らな瞳で私を見つめる兄さん。しかし、私はそれを無視して、鞆を持たせた。

「どうぞ。それでは、いつてらっしゃい。精々、会社の皆さんの足を引っ張らないよう、頑張ってください」

「わかった」

兄さんは独り立ち出来るのだろうか。脳裏に過ったそんな不安を押し込め、私はドアを開けた兄さんの背を見た。しかし、その向こうには何故か伏さんがいた。

「お嬢ー！！ あっ！ お義兄さん！！ お嬢を下さゴフウウツ！？」

「あれえ？ なんか蹴っちゃったような気がするー。気のせいかなあ？」

「いやいやいやお義兄さん！？ 全然気のせいじゃないからね！！ オレ、此処にいますよー！！」

「あれえ？ 幻聴まで聞こえるー。ひーちゃん、やっぱり僕、休もうかなあ」

「一人で変なことしないで早く会社に行ってください」

「えええええお嬢までオレの存在無視！？」

「はあい、行ってきましたあす」

「ガハアツ！！　ちょ、これ、わざと！？　わざとだよね！？」

今日も何故か外が騒がしい。私は外の騒音を聞こえないふりをし
て、読みかけの本を読みに行った。

注意しても良いですか（後書き）

不審者と加害者と被害者。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3303z/>

短編集

2011年12月29日21時47分発行